

# 幼稚園及び保育所における動物飼育活動の意義 ——実習生の体験から——

百瀬ユカリ

## Effects of Animal Assisted Activities in Early Childhood Education

Yukari MOMOSE

### 1. はじめに

現代社会においては、子どもの日常生活にも情報化の影響が強く現れている。ソーシャルメディアへの過度の依存により、他者への尊厳や存在意義を認め合う気持ちが欠落し、コミュニケーション能力の低下が指摘されている。そのため、自他への共感、思いやりの心を培うのが教育の重要な課題の一つとなっている。自分はもちろん他者も大切にしなければならないという正しい生命観、価値観を、幼児期から児童期にかけて築いていくことが大切である。特に幼児期の子どもにとって、「命あるものから学ぶ」体験としての動物介在活動は、「生命尊重」や「心の教育」として必要である。一方、近年の住宅事情や地域環境の変化に伴い、家庭での動物とのふれあい（動物飼育）は、以前より難しくなっている。

幼稚園と保育所及び認定こども園の動物とのかかわりに関しては、保育内容として領域「環境」の中に示されている。幼稚園教育要領では、領域「環境」の「3. 内容の取り扱い」のなかで「(3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。」としている（幼保連携型認定こども園教育・保育要領も同様）<sup>(1)(2)</sup>。また、保育所保育指針にも保育内容「環境」のなかで、「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。」と示している<sup>(3)</sup>。このように、幼児期において生命を大切にする気持ちなどの豊かな心情を育てるために、飼育活動など動物とのかかわりが重視されている。

幼稚園及び保育所での動物とのかかわりは、子どもにとって扱いやすい小動物（例：ウサギ、モルモット、小鳥、キンギョなど）を決まった場所で飼育する方法だけではない。子どもが捕まえてきた虫（幼虫や、カタツムリ等も含む）を一定期間、飼育ケースなどに入れて飼うことも生き物とのかかわりといえる。その他、移動動物園など、専門の業者に依頼して行事として動物とのふれあ

い活動を行う場合もある。本研究では、「命あるものから学ぶ体験」としての「動物飼育活動」についての現状と捉え方を保育者への質問紙調査で傾向を調査した。それによって、幼児と動物とのかわりに焦点を当て、飼育活動を通して子どもたちにどのような育ちが見られるのかを明らかにしたい。さらに、保育者を目指す学生の幼稚園・保育所実習後の聞き取りから、学生が体験した保育現場での動物飼育活動について調査した。それによって、改めて「命あるものから学ぶ体験」「生命尊重の心を育む」活動としての動物飼育活動について、保育者を目指す学生への準備学習指導の指針とし、保育者養成の過程における学びの内容への改善点と今後の方向性を見出そうとするものである。

## 2. 幼稚園及び保育所での動物飼育活動の傾向

### (1) 研究方法

東京都、埼玉県内の幼稚園・保育所の保育者に各50部、質問紙を配布。場所ごとに直接回収または郵送による回収を行った(2014年11月～12月に実施)。調査内容は、動物飼育活動の内容、動物飼育の世話(担当者)、動物飼育活動の教育的意義についてなどで、選択肢と自由記述の回答方法による。

### (2) 結果及び考察

#### ①回答者の属性

保育者は、幼稚園・保育所各8か所、計16か所に依頼、回収は91通で有効回答は88通。女性が98%である。年齢層は、74%が20代で、16%が30代である。以下、主な設問の回答結果と考察を述べていく。

#### ②幼稚園・保育所の飼育動物の種類

園で動物飼育をしているかどうかの回答は、「している」が96.7%であった。図1のように、最も多くの園で飼育されていたのは、魚類(但し、キンギョ、メダカ、ドジョウ、グッピーほかの合計)と昆虫類(カブトムシ、クワガタ、ダンゴムシ、バッタ、カマキリ、チョウほかの合計)で、各93.2%であった。回答を得たほとんどの園で、魚類または昆虫類を飼育していた。昆虫類の中には、園庭で子どもが捕ったものを数日間から一カ月程度のみ飼育するケースが多数含まれている。また、魚類のほとんどがキンギョまたはグッピーをはじめとする熱帯魚で、各クラスの保育室での飼育というより玄関ホールに水槽が置いてあるだけの園も多かった。

次いで、ウサギ40.9%、ニワトリ以外の鳥類(主にインコ)38.6%、ザリガニ20.5%、ハムスター17.0%、カメ14.8%であった。鳥インフルエンザの流行によって、特に保育所において鳥類の飼育をはじめ動物飼育そのものまで止めているケースが、自由記述から多く見られた。ほ乳類系の小動物(ウザギ、ハムスター、モルモットなど)の飼育が行われていたのは、ほとんどが幼稚園であった。

幼稚園及び保育所における動物飼育活動の意義

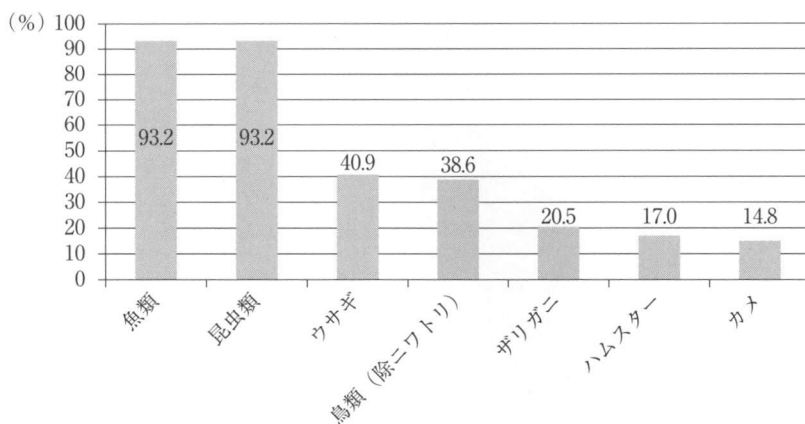


図1 幼稚園・保育所の飼育動物

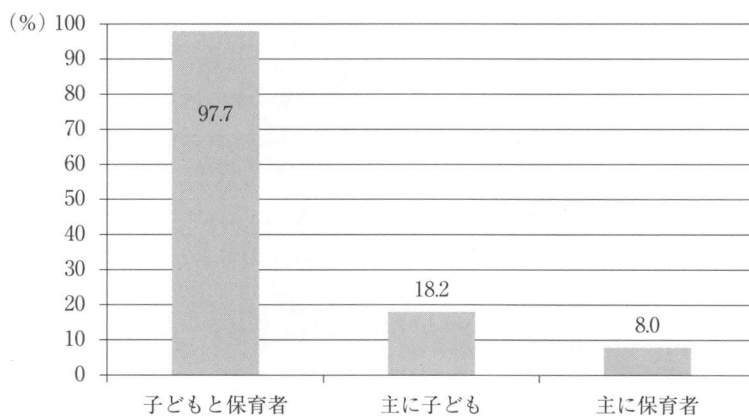


図2 動物飼育の世話をするのは (担当は) 誰か

③動物飼育の世話をするのは (担当は) 誰か

飼育動物によって担当が違う観点から、複数回答を可にした。幼稚園・保育所の飼育動物の世話は、図2のように「子どもと保育者が行う」が97.7%、「主に子ども」18.2%、「主に保育者」8.0%の順であった。主に飼育されている動物が、魚類・昆虫類なので、「子どもと保育者が行う」がほとんどであることが理解できる。しかし、中には園長・主任が世話をしている飼育動物 (玄関の水槽の世話など) の存在も少なくないことがわかった。また、「主に子ども」は、「園庭で捕まえてきた虫を飼育ケース (または代用の容器) で飼う」場合が多いことが自由記述よりわかった。

④動物飼育活動の教育的意義について

保育者の考える動物飼育活動の教育的意義としては、「動物を大切にできる体験となる」「生命あるものを大切にできる体験となる」「友達との共有体験となる」「共感した心情をつたえあう意欲につながる」「動物に興味を持ち、科学的な学習へのきっかけになる」「飼育観察を通して生命の成長に興味を持つ」「特に意義は感じない」「その他」を選択肢とした (「幼稚園教育要領解説」「保育所保育

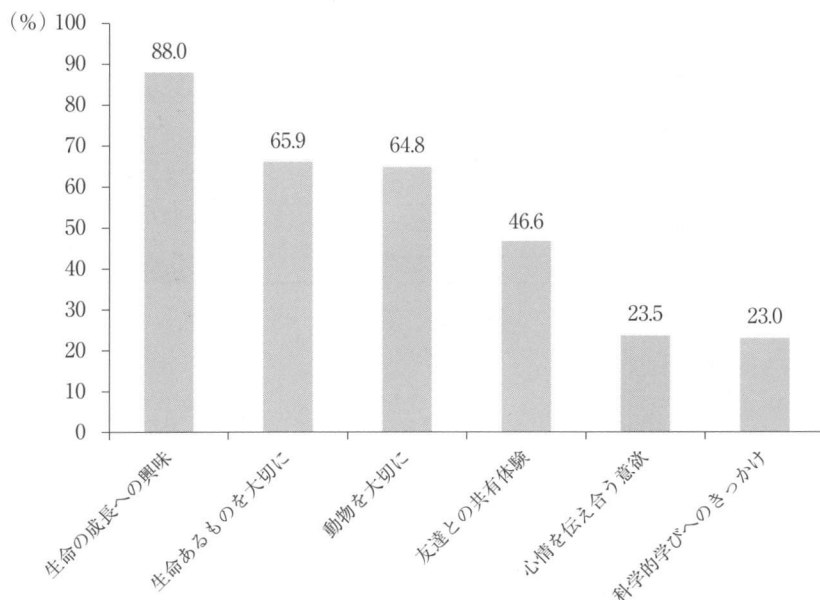


図3 保育者の考える動物飼育活動の教育的意義

指針解説書」他を参考)。回答は複数選択を可とし、その結果は図3のように「飼育観察を通して生命の成長に興味を持つ」が88.6%で最も多かった。次いで「生命あるものを大切に体験となる」が65.9%、僅差で「動物を大切に体験となる」64.8%であった。

幼児は、飼育観察の対象物に対して、その姿・形、動きにまず興味を持ち、じっくり様子を見ること（観察）から始まり、やがて触ろうとする。その後、日々成長をする対象物（例：幼虫やオタマジャクシなど）については、その姿・形に対してまさに生命の成長を実際に目の当たりにすることになる。こうした子どもの驚きや喜びの気持ちに寄り添う保育者のほとんどが、動物飼育活動の教育的意義として「飼育観察を通して生命の成長に興味を持つ」と、実感しているであろう。

#### ⑤自由記述の内容と考察

適切な環境のもとで動物飼育活動を継続していくことについては、概ね肯定的であった。傾向としては、幼稚園は動物飼育に対して肯定的意見が多く、保育所からは動物飼育の難しさを指摘する記述が多かった。「鳥インフルエンザの流行を機会に動物飼育を全てやめてしまった」「動物の毛のアレルギーや、鳥の羽根でアレルギー反応が出る子どもが入園してきて、動物飼育を止めざるをえなかった」との記述もあった。

動物飼育活動について困ったこととしては、「飼っていた動物が死んでしまった時の対応は、いつも考えさせられる」「飼っていたウサギが病気になった時に、どうしたらよいのか困った」「長期休暇の時の動物の世話は、いつも保育者が輪番になる」などがあげられた。

この質問紙調査に回答をしたことで、「改めて子どもに、命の大切さを伝える機会として、かかわっていきたくと思った」「当番活動としての動物飼育活動が中心になりがちだが、子どもが園庭から捕ってきた虫を飼うことも、大切な経験だと感じている」「ゲーム等を通して生命について軽

く感じてしまっている子どもが多くなっていると聞くので、生命の大切さや物の有り難さなど、日々の生活の中で伝えられることは、しっかりと伝え、優しい心を育てたい」などの内容の記述が複数あった。保育者にとっても、社会的な状況、子どもを取り巻く環境等の変化に合わせ、日々の取り組みの中での動物飼育活動のあり方や意義を再認識できる機会も大切になりそうだ。

以上のように幼稚園及び保育所での動物飼育活動の概要が掴めたが、こうした保育現場で実習を終えた学生は、体験した動物飼育活動についてどのように感じたのであろうか。

### 3. 幼稚園及び保育所で実習生が体験した動物飼育活動より

#### (1) 研究方法

幼稚園・保育所それぞれの実習を終えた学生各3人に、質問紙を基に聞き取り調査を実施。筆者との一対一の面接で、調査の目的と方法を明確に伝えてから行った（2015年7月～9月に実施）。質問紙を読み上げながらの質問をして、全学生に対して偏りのない対応とした。聞き取り時間は一人30分程度である。調査内容は、動物飼育活動の内容、動物飼育の世話（担当者）、動物飼育活動の意義についてなどである。

#### (2) 結果及び考察

##### ①回答者の属性

回答した実習生の基本的情報は、次の通りである。

・実習園：幼稚園 3名（東京都、千葉県、新潟県各1名）

保育所 3名（東京都2名、千葉県1名）

・実習期間（年月）2015年5月中旬～9月上旬

##### ②飼育活動の内容

質問：あなたの実習園では動物や昆虫・魚等の飼育活動をしていましたか。飼育活動以外で動物とのかかわりについても、その内容をできるだけ具体的に述べて下さい。その中で印象的な場面に對して思ったことを率直に述べて下さい。

#### 事例1：保育所（8月）

玄関に大きな水槽で金魚を8匹程度、3歳児クラスと5歳児クラスでそれぞれザリガニとドジョウを飼っていた。ザリガニとドジョウは、昆虫を入れる飼育ケースに入れて飼われていた。しかし、子どもが飼育している様子（えさを与えたり、水替えをしたり）を見ることはできなかった。  
〈印象に残った場面〉

3歳児クラスのザリガニは横になってドジョウは干からびていた。「このザリガニとドジョウ生きているの？」と聞いてみたところ、子どもたちは「ううん、もう多分死んでるよ」と答えた。この子どもたちはザリガニとドジョウが「かわいそう」だとは思わないのだろうか、先生はこ

のザリガニとドジョウの実態をわかっていないとは思えないので、残念な気持ちだった。

5歳児クラスは4月から野菜の栽培活動をしている。8月になって収穫の際にプランターを動かすと、ゴキブリやムカデが這い出し、土の中には何かの幼虫やミミズがたくさんいた。男の子も女の子も逃げ回って、その虫たちを蹴ったり踏みつけようとしていたりしていた。それを見ていた5歳児クラスの担任は、「土の中はすごく気持ちの良い場所だから、虫たちも住みやすいんだよ。こんなに大きな人間(子どもたち)がたくさんいて虫さんたちの方が怖いと思うよ」と声をかけていた。飼育活動ではないが、先生が子どもたちに、虫にも命があるものなのだと伝えている場面だと実感した。それからは子どもたちも虫たちに驚きながらも、踏みつけたりせずに土を耕したりプランターを片付けたりしていた。

### 事例2：保育所(8月)

実習した保育所では、特に動物飼育はしていなかった。

#### 〈印象に残った場面〉

2歳児クラスの子どもが、午後、園庭で遊んだ時にダンゴムシを捕まえ、バケツに入れて遊んでいた。手で強くつかむのではなく、優しく手のひらに乗せてダンゴムシを見ていた。そして、ダンゴムシが丸くなってしまった時には、「ダンゴムシさん寝ちゃった」と言っていた。片付けをして、保育室に戻る時は、ダンゴムシを捕まえた場所に戻し、「また遊ぼうね」とさよならをしていた。ダンゴムシに触ることはできても捕まえることはできない子どもたちにも、先生が捕まえて「優しくね」と伝えていた。保育室で飼うことはなかったが、先生が「ダンゴムシさんいるかな」と積極的な言葉がけをして生き物へ目を向け、触れさせる機会を作っていると感じた。

また、プール遊びをしている時に、チョウが飛んできた。すると、ある子どもがチョウに水鉄砲で水を発射して当てようとした。先生は「チョウチョさん嫌がってるよ。水をかけたら〇〇保育園に遊びに来れなくなるよ」と言っていた。それを聞いて子どもは、水をかけるのをやめた。日常のさまざまな場面で命の大切さを伝えることが大切だと思った。

### 事例3：幼稚園(6月)

水槽に、熱帯魚(6種類)とエビを飼っていた。一階の玄関とトイレの前に置いてあり、全園児が見える場所だった。水槽の横に、全種類の魚についての名前と写真、説明が貼ってあった。ほぼ全てが珍しい種類の魚で占められていた。水槽は、ブラックライトを当てて、普通的水槽とは別世界のような演出で、園児の興味を惹きつけていた。実際に、室内遊びの時間や登園時に、数人の園児が水槽に向かって話し掛けたり、先生と一緒に「このお魚、いま何をしているのかな」と言いながら興味を示している園児が多かった。

#### 〈印象に残っている場面〉

水槽の生き物に興味のある子どものなかには、水槽を叩いてしまう子どももいた。そのような子どもに対して、先生は、叱るのではなく、「魚さんたちが驚いてしまうから、やめてあげて。〇〇

くんも魚さんたちの気持ちになつたらわかるよね」と声かけをして、子どもにとっても、人も魚も同じ命ということをおぼえてもらえる機会が多くあったと感じている。

#### 事例4：幼稚園（5月）

4歳児クラスで、飼育ケースでアオムシを飼っていた。えさは、キャベツであったが、まだ子どもたちが餌やりをする役割を決めていなかったため、子どもたちが降園してから担任が世話をしていた。また、5歳児クラスでは、プラスチック製のたらいの中にカメを飼っていた。大きな石も入れてあった。廊下のケージにウサギも飼っていた。当番の子どもが毎日交代で水を取り換えて餌やりをするなどの世話をしていた。また、廊下の鉢植えのかんぎつ類の木の葉の上で、アゲハの幼虫を飼っており、園長先生が世話をしていた。

##### 〈印象に残っている場面〉

4歳児クラスでは、ある朝、担任の先生が「みんな、アオムシさんが昨日とちょっと変わったの、気がつきましたか」と声かけをした。すると、子どもたちは「何だろう」と飼育ケースの前に集まった。そしてしばらく見て、「昨日より少し大きくなって！」との声があがった。他の子どもたちも「ほんとだ！」「すごい、すごい」と感動していた。担任の先生が「みんなと同じように、アオムシさんも少しずつ大きくなるのね」と言うと、子どもたちは「チョウになるのが楽しみだね」と話し合っていた。

5歳児クラスでは、行事が重なって、当番活動が何日間か無かったある日、ある子どもが「先生、カメの水が汚れてるよ」と言った。担任の先生が、その言葉に共感すると、その子どもは「汚れていたらかわいそうだから、今日はいっぱいきれいにしてあげよう！」と言った。その日のカメのお当番さんは、いつもよりも一生懸命に仕事をして、見事にカメのおうちをきれいにしていた。ピカピカになったカメのお家を見て、子どもたちはとても嬉しそうにしていた。

#### 事例5：幼稚園（6月）

園庭の池でカメを飼っていた。飼育は、保育者が行っていた。子どもたちは、カメが食べている様子や泳いでいる様子などを見ていた。また、ホールではカブトムシと熱帯魚を飼っていた。餌は5歳児の当番の子どもたちが与えていた。担任の先生がいる時だけは、3歳児・4歳児もカブトムシに触れるようにしていた。

##### 〈印象に残っている場面〉

園庭で3歳児が自由遊びをしている時に、池にいるカメに対して砂をかけたり、餌のつもりで近くに咲いている花をとって池に入れたり、草を入れたりしていた。その時に近くにいた保育者が「みんなはお砂をかけられたらどう思うかな。痛いよね。嫌な気持ちになるよね。カメさん、お砂かけられて喜んでいるかしら」と問いかけると、子どもたちは「痛いって言ってる」と答えていた。花や草に関しても「先生がさつきカメさん用の餌をあげたから、草や花を食べるとお腹がいっぱいで動けなくなってしまう。動いているカメさんを見ていたいよね。お友達のカメさん、大

切に育てようね」と子どもたちに伝えていた。生き物に対して、してはいけないことを注意し、大切に育てることと、命の大切さを伝えていることを感じた。

考察：今回の聞き取り調査では、幼稚園・保育所ともに飼育動物は魚類が主であり、次いで虫とカメであった。動物飼育をしていない園もあり、野菜の栽培活動を通して虫や生き物にかかわるといった例もあった。保育者への質問紙では4割近い園での飼育されていたウサギを飼育していたのは1園だけであった。今回の聞き取り調査に応じた学生の実習園では、ほ乳類系の飼育動物はほとんどいかなかったが、生き物にかかわる機会は、どの園の事例にも出ており、それぞれの園での工夫が察せられる。

最近、小動物（鳥なども含む）を飼育できない環境の幼稚園や保育所が増えているようだ。こうした環境で、動物飼育活動に教育的な意義を感じている保育者は、捕まえてきた虫を短期間だけ飼育する活動や、水槽に飼っているキンギョを見るといった、小さなきっかけによって生命の大切さを伝える保育を展開しているといえよう。

### ③学生が感じたこと

質問：動物飼育活動に関することで、保育者になる前に学ぶ必要があると思うことは何ですか。その他、幼児期に「命の大切さ（生命尊重）の気持ちを育む」ために必要だと思うことなどを自由に述べてください。

#### a. 動物飼育に関係することで保育者になる前に学ぶ必要があると思うこと

- ・虫や動物の名前を覚えておく。
- ・園でよく飼われている動物についての知識や、いろいろな園で飼われている動物の飼い方。
- ・動物の命の大切さを知ること。
- ・動物にも人間と同じようにしっかりと気持があることを知る。
- ・子どもたちに生き物を飼うこと、育てることの大変さを伝えるにはどうすればよいか。
- ・アオムシなど園で飼う可能性のある生き物の基本的な育て方や扱い方。
- ・どのような生き物が、幼児にとって親しみやすく扱いやすいのか。
- ・身近な動植物の知識を身に付けておくこと（自然遊び等で子どもたちとコミュニケーションがとれやすくなるのではないか）。
- ・生き物が亡くなった時に、子どもたちにどのように伝えるのか、それをどのように命の大切さを伝える活動にしていっていいのか分からない（命の大切さを考える機会があるといいと思う）。

#### b. 幼児期に「命の大切さ（生命尊重）の気持ちを育む」ために必要だと思うことなど

- ・たくさんの生き物とかかわる機会を作ることが、生き物とのかかわりを通して優しく接することを教えることになると思う。子どもが力加減が分からず、もしも生き物を殺してしまった場合は、お墓を作ったりして命について考える機会にしたい。



・動物飼育は、生き物と直接かかわるので命の大切さが伝わると思うが、園外に出て、様々な生き物を見たり触れたりすることも大切だと思う。図鑑もよいが、自分の目でたくさんの生き物を見ることで、自然の中で様々な生き物も存在して生きていることが分かる。人間だけではなく、どんなに小さい生き物でも毎日生活していることが少しでもわかることで、生命尊重の心が育まれると思う。

・命の大切さを学ぶためには、「寿命を終えること」を知り、死を目の当たりにすることも大切ではないか。可能であれば、繁殖・誕生の場面などを、代々下のクラスの子どもたちに受け継いでいくとさらに良いと思う。

・例えば、園全体でニワトリを飼う。ニワトリが産んだ卵を給食で使ってもらおう。卵を一つ産むために、ニワトリは一生懸命にごはんを食べて栄養をつけていることや、卵は一つの大切な命であること、一生懸命にニワトリが育て産んだ卵を食べるありがたさを知ることになる。さらに、自分たちは大切な命をいただいて元気に活動ができることを学べると良いと思う。

・今回の実習中の子どもと飼育動物活動を振り返る機会を得て、“生き物がすぐそばにいる”ということが、幼児期には必要だと思った。直接、生き物に触ることや生き物の成長を実感して「すごい」と感じることで、生き物の気持ちになって考えてあげられること、その経験が「命の大切さ（生命尊重）の気持ちを育む」ことにつながっていくと考える。

・命というものを尊敬すること、守ってあげなくてはと思うこと、あたたかいと感じることが幼児期には大切だと思う。そのような体験ができるような環境を作ることが保育者に求められていると感じた。特に今は家庭で生き物を飼うことが制限されていると思うので（集合住宅など）、幼稚園や保育所などにその役割が必要なのだと思う。

・動物や昆虫、魚を自分たちで飼育したり、触れ合うことで、生き物には命があることを知ったり、生き物の命を身近に感じるができると思う。また、生き物が亡くなって悲しい経験をする中で、改めて命の大切さを感じ、命を大切にしようとする気持ちがさらに育っていくのではないだろうか。こうしたことから、生き物を飼育する体験は幼児期に必要なことだと思う。

・動物や昆虫、魚などの生き物だけではなく、野菜を育てたりする体験も大事だと思う。自分たちで育てることで、自分たちと同じように成長しているので食べ物にも命があることを知ることができ、命を頂いている大切さを知る機会になると思う。幼児期は野菜を育てることも必要な体験だと思う。

・自分自身を振り返ると、小さい時からずっと犬やキンギョなどのペットや虫などの生き物が身近にいた。その頃、ペットが亡くなった事に対する気持ちは、今でも鮮明に残っている。小さい頃に経験したことは、必ず残っていくと思う。園によっては生き物等を飼育して実際に生命尊重の気持ちを育むには難しい環境がある。しかし、どのような形であれ、命の大切さは伝える必要があるだろう。動物園等に行って、人間以外にも多くの命があること、そして、その命の一つひとつがとも大切な存在であることを伝える必要があると思う。

考察：学生が実習園で体験してきた動物飼育活動について聞き取り調査を行って、次の点が明らかになった。

①動物飼育に関係することで保育者になる前の学びの必要性を感じている項目

- ・飼育動物に関する知識：飼育に向いている動物や虫、魚などについての種類及びその飼育方法、飼育動物の扱い方、飼育動物の特徴的なことなど。
- ・道徳、責任感の指導：動物の命の大切さを知り、育てることの大変さを伝えたり、死に向き合う時の心構え的なことなど。

②幼児期に「命の大切さ（生命尊重）の気持ちを育む」ために必要だと思うこと

- ・幼稚園及び保育所での動物飼育活動
- ・生き物とかかわる機会を飼育活動以外にもなるべく多く作る。
- ・生き物の死に向き合う体験
- ・生き物だけでなく野菜栽培などを通して、命あるものを頂いていることを知ること。

に分類できる。聞き取りの際に動物飼育活動についての内容を詳しく話していた経緯もあり、動物飼育活動については全員が必要であるとの声が聞かれた。そして、複数の声として、「生き物を飼うこと」以外に、「野菜栽培など」も幼児期に命の大切さ（生命尊重）の気持ちを育むために必要な体験であると感じていることがわかった。

#### 4. おわりに

今回の調査結果を踏まえ、幼稚園及び保育所での動物飼育活動に対して、保育者も保育者を目指す学生からも改めて「子どもに、命の大切さを伝える機会として必要な体験」であり、教育的意義を実感していることがわかった。一般に動物飼育活動というと、特定の小動物を決められた場所で飼育する姿を思い浮かべる。しかし、子どもが園庭で捕まえた虫を飼うことも、また、その虫の死に直面することも大切な経験である。一方、保育者はその際に命の大切さをどのように伝えるかという対応の難しさを感じていた。

保育者にとっても、保育者を目指す学生にとっても、今回の質問紙調査や聞き取り調査は、社会的な状況、子どもを取り巻く環境等の変化に合わせ、日々の取り組みの中での動物飼育活動のあり方や意義を再認識できる機会になったようだ。幼児期に動物飼育活動を取り入れるための準備として、基本的な飼育動物についての知識を豊かにしておくことや、子どもへかかわる専門職に就いている者としての生命観・責任感も大切である。

動物飼育活動は、命に正面から向き合い、子どもに「命の大切さ」を育むための保育活動の一つである。保育者養成の学びの中で、具体的な方法が理解できる取り組みを直接体験することが必要であろう。今後は、学生が知識と実際の両面から動物飼育活動について取り組める具体的な方法や機会を考えていきたい。

引用文献

- (1)文部科学省 (2008)「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
- (2)内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2015)「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」〈原本〉チャイルド本社
- (3)厚生労働省 (2008)「保育所保育指針解説書」フレーベル館

参考文献

- 井上美智子・無藤 隆 (2009)：「幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 (2) 一動物飼育の実態一」大阪大谷大学教育福祉学科 (編) 教育福祉研究 第35号 1-7 頁
- 今野洋子・佐藤満雄・舟橋彰子 (2012)：「動物介在教育における動物愛護教室の現状と課題 一幼稚園教諭を対象とした質問紙調査から一」北方圏学術情報センター年報 第4巻 59-63 頁
- 片山由美他 (2009年)：「幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察 一動物の世話をとおして一」花園大学社会福祉学部研究紀要 第17号 13-21 頁
- 金岡美幸・谷田 創ほか (2012)：「幼稚園における動物介在教育の実践一生き物との関わりが幼児の生活リズムに及ぼす影響を明らかにするための基礎的研究一」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第40号 295-299 頁
- 甲田菜穂子 (2011)：「身近な動物との関わりから学べること」『教育と医学』 86-92 頁
- 社団法人日本獣医師会 (2009)：「動物介在諸活動 (動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育) と獣医師及び獣医師会の役割」1-6 頁
- 谷田 創・木場有紀 (2014)：「保育者と教師のための動物介在教育入門」岩波書店
- 三上崇徳・木場有紀ほか (2008)：「広島県下の私立幼稚園における動物飼育に関するアンケート調査」Animal Nursing 第13巻 第1号 55-61 頁
- 並木美砂子 (2008)：「子どもが動物に出会うとき」風間書房
- 中川美穂子 (2007)：「小学校における動物飼育活動の教育的効果とあり方と支援システムについて」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 第4巻 53-64 頁
- 藤岡久美子 (2013)：「子どもの発達と動物の関わり一動物介在教育の展望一」山形大学大学院教育実践研究科年報 (4) 5 頁
- 百瀬ユカリ (2015)：「動物園における幼児の動物ふれあい活動に関する考察」大東文化大学教育学研究紀要 第6号 49-63 頁

(2015年9月29日受理)